

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5539号  
1月号  
平成24年1月6日発行  
宮崎県  
宮崎地方气象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

〈1週目の予報〉 1月7日(土)～1月13日(金)

高気圧に覆われて晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並の確率50%です。

〈2週目の予報〉 1月14日(土)～1月20日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

〈3週目から4週目の予報〉 1月21日(土)～2月3日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

## 普通作物

### ◆ 早期水稲

---

昨年の早期水稲は、湯水で計画通り田植えができず老化苗となったり、移植後も低温により初期生育が停滞しました。これらの影響は軟弱苗ほど大きく、改めて健苗育成の大切さが感じられたところです。

今年も様々な気象変動や病虫害の発生などに備え、県や関係機関及び各種メディアの情報に注意し、迅速な対応で良質米の安定生産に努めましょう。

#### 1 水田周辺の整備と土づくり

周辺の作業として用排水路の清掃や畦草の除去など行い、ほ場では深耕及び堆肥・土壌改良資材の投入による土づくりを行います。

#### 2 種子予措

早期水稲の健苗作りは、気温の低い時期に、出芽揃いを良くすることから始まります。そのためには、次のような管理を播種までの間にしっかりと行いましょう。

##### ① 優良種子の選別

採種ほ産の種子を10畝当たり、3.5～4.0<sup>キ</sup>準備し、枝梗などをよく取り除きます。発芽勢の良い種子を選別するため、水10<sup>リ</sup>に食塩を800<sup>グ</sup>入れて塩水による選別を行い、沈んだ種子を水洗いし種子として使用します。

##### ② 種子消毒

「いもち病」や「イネシンガレセンチュウ」は種子からも広がります。種子消毒時の袋詰めは、袋に余裕を持たせ薬液が中心部の籾に十分付着するようにし、稲作こよみにある殺菌剤、殺虫剤を適正な濃度で使用して消毒を徹底します。種子消毒後は水洗いはせず風乾し、浸種作業へ移ります。

##### ③ 浸種

種もみを浸す水の量は、種子1に対し水2の割合とし、水温は10～20度の範囲で温度変化の少ない日陰で行います。水温が10度の場合は10日間、15度の場合は7日間程度と浸種期間を十分とり、この間の水の交換は2～3日間隔とし、種子消毒剤が流亡しないよう静かに行います。水温が20度以上では、出芽むらが生じやすくなるので注意します。

## ◆ムギ類

---

### 1 麦踏み

今年のムギは、播種時期の降雨の影響も無く順調に発芽していますが、気温が高温で推移した場合、生育が進みすぎる恐れがあります。

麦踏みは耐寒性を高める効果や、分げつの増加、稈の伸びすぎを抑えて倒伏を防止するなどの効果があります。節間が伸長し始める前の1月上中旬から2月中旬までに鎮圧をします。

### 2 追肥

ムギは施肥による影響が大きい作物です。特に窒素は流失しやすいので、1月中旬に分げつ肥として窒素成分で10 $\bar{\text{a}}$ 当たり2.5 $\bar{\text{a}}$ 程度追肥します。

( 鎌田 博人 )

## 施設野菜

### ◆共通事項

---

厳寒期となります。午前中の温度を十分確保し光合成を促進するとともに、午後からの換気に注意します。特に風が強い場合には風下側を中心に開放したり、谷換気の幅を小さくするなど、換気によってハウス内の温度変化が大きくなるように十分注意します。また、翌朝冷え込みが強いと予想される場合には、夜間の温度を普段より高めに管理します。

かん水は、晴天時の午前中の早い時間帯に行い、地温低下を防ぎます。追肥は硝酸態窒素主体の液肥で行います。

### ◆きゅうり

---

促成きゅうりの摘心栽培では孫づるの、また、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期となります。

①摘心栽培では、草勢が低下すると、不良果が発生しますので、早めに摘果を行います。また、採光・通風を良くするために、ひ孫以降の成長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を整理します。

追肥は、10 $\bar{\text{a}}$ 当たり窒素成分で、月に5～6 $\bar{\text{a}}$ をかん

水時に施用します。

②つる下ろし栽培では、今後「芯止まり症」が懸念されますので、成長点の状態を確認しながら摘葉を行います。3節に1果は摘果して草勢の維持に努めます。また、過度の摘葉は草勢低下を助長するため、着果節下5～6枚の葉を確保します。

追肥は、摘芯栽培と同様に行います。

#### ◆ピーマン

---

促成ピーマンは、着果の状況に注意しながら肥培管理を行います。

着果量が多い場合にはかん水を多めに行うとともに、夜温を普段より高めに管理し、果実の肥大を早めます。

また、追肥は遅れないように注意します。2月までは、月に10㎡当たり窒素成分で3～4kgを施用します。

#### ◆トマト

---

トマトは野菜の中で、最も強い光を必要とします。内張ビニルを十分開放し、光線の確保に努めます。また、果実の肥大、着色促進、食味向上のためには、15～18枚の葉を必要とするため、つる下ろし時の過度の摘葉は避けます。

#### ◆いちご

---

いちごは、適正な温度管理に努め、開花から45日程度で収穫できるように管理します。大玉果の生産や食味向上のため、1株当たり10果前後に摘果します。

追肥は、多すぎると根痛みを起こすので注意します。液肥を主体に、月に窒素成分で10㎡当たり2～3kgを2～3回に分けて施用します。

(郡司 孝幸)

### 葉茎根菜類・いも類

ハウスやトンネルによる半促成栽培の播種期及び早熟栽培の定植期となります。支柱立てやビニル被覆など植付け準備を計画的に進め、適期に植付け、は種ができるようにします。

## ◆スイートコーン

---

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬からは種適期となります。地温が低いと発芽率が低下するので、地温を高目に保持することが重要となります。は種1週間前までには、トンネル被覆を行い地温を確保して下さい。なお、早播きしすぎると、地温不足による発芽不良を起こしたり、桿が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に、葉や雄穂がビニルに接触し、先端不稔等の品質低下を招きますので、播種期を守りましょう。来月播種する小型トンネル栽培の準備も始めましょう。

## ◆食用かんしょ

---

小型トンネル栽培の育苗～定植期です。換気に注意しながら、丈夫な苗に仕上げます。1月中旬以前の早植えは地温が十分に確保できずに肥大根の着生や伸長が悪く、丸いものになりやすくなります。定植時期は地温確保が容易になる1月末以降とし、定植の1週間前にはトンネル被覆を行い、十分に地温を確保して定植します。

## ◆ばれいしょ

---

春作は下旬より植付け期となります。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗となっていますので植物防疫検査印のある健全な種芋を用いましょう。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には、切り割りして植付けてください。

## ◆ごぼう

---

9月から10月にかけて播種した水田ごぼうが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安は、トンネル栽培のものは播種後100日、マルチ栽培は130日くらいです。

(河野健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆完熟きんかん

1月中旬から、完熟きんかんの出荷が始まります。収穫は、着色や食味を参考にしながら開始します。収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐために、昼温は15度を目安に管理します。また、裂皮を防止するために、早朝の換気等により、施設内の湿度を低く維持しましょう。

完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、収穫カゴ周囲の緩衝材設置や、果実の過度の積み重ねを避け、取り扱いには十分注意しましょう。

#### ◆マンゴー

今年は、秋季の日照不足のため、7月以降に剪定した園の枝の充実不足が見られます。また、11月の高温により、花芽分化が不十分な園も多く見られます。このような園では、萌芽のばらつきや質の悪い花の発生によって、結果不良やミニマンゴーの発生が予想されます。花芽が見え始めたら、早い段階からかん水を行い、芽が動きやすい環境を確保しましょう。また、昇温の過程を例年よりも慎重に行い、じっくりと花芽を作りましょう。

萌芽のばらつきから、開花期間が長くなり、適期防除ができないことも予想されます。開花前の予防的防除を徹底しましょう。

開花期に湿度が高くと、果実に灰色カビ病が発生し、果実品質が低下します。換気や夜間の十分な加温によって、湿度を低く保ちましょう。花穂が伸びてきたら、ひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。加温用のダクトを使って病気の発生を抑制する方法もあります。普及センターやJAに相談してみてください。

また、満開期のホウ素剤の散布、幼果期のカルシウム剤の散布により、果実の生理障害を防止しましょう。

## 2 果樹全般

---

#### ◆縮間伐・剪定

多くの果樹で、初期収量を確保するために、計画密植栽培が行われています。枝が隣の樹とふれはじめたら、縮伐や間伐を実施しましょう。

剪定においては、主枝、亜主枝の配置を考えた剪定が重要です。また近年、多くの果樹で、着花不良や結果不良が見られます。健全な樹勢を維持し、適正な結果枝や結果母

枝を確保するように、間引き剪定と切り返し剪定を組み合わせで行いましょう。

また、低樹高栽培は、収穫や管理作業の省力化、防除効果の向上に加え、風に強くなることで、傷果の減少や台風の被害も軽減されます。切り返しや間引きにより、数年かけて低樹高化を図りましょう。

(山口和典)

## 花き

### ◆電照ギク

---

白の主力品種「神馬」は親株や定植後から消灯までに13度以下の低温に合うと「幼若性」を獲得し開花が遅延することが明らかになっています。1～2月に消灯する作型は花芽分化時期が1年で最も寒い時期に当たりますので、夜温を十分に確保できるように暖房機の設定温度や停電・事故には十分に気を配ってください。低温に遭遇した場合は、消灯2週間前から夜温15度で予備加温を行ってください。消灯後は18時から1時までは15度、1時以降は12度の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。また、再電照時期の決定は品質向上の観点からも必ず検鏡してから決定するようにしてください。低温期はハウス内の湿度が高くなりやすいので白さび病が多発します。十分な換気を行うとともに、予防及び適期防除を心がけましょう。

### ◆スイートピー

---

12月から気温も下がり、日照時間が多く、スイートピーに適した気象条件になっています。11月までの天候不良の影響を受けているほ場もありますが、障害もおおむね回復し、比較的安定した生育に入りつつあります。過かん水による落蕾・落花を発生させないよう草勢に応じた肥培管理を行ってください。極端にかん水を控えると需要期の2～3月にステムが短くなり商品価値が低下してしまう危険性があります。窒素肥料を追肥する場合、地温の低下するこの時期は、硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。

### ◆デルフィニウム

---

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽台・伸長しますので、採光を良くして硬さとボリュームを確保してください。中山間地域のロゼット打破作型では抽だい時期になりますが、3月出荷に向けて生育ステージにあった温度管理を実施するとともに、軟弱徒長とならないように芽の整理を行い適正本数にしましょう。

#### ◆ホオズキ

---

早い産地では下旬から植え付けが始まります。毎年ネコブセンチュウや白絹病等が問題になっていますので、土壌消毒を行ってください。土壌消毒は事前にビニルフィルム等でべたがけを行い、地温を上げておくとガスが拡散しやすく効果的です。また、地下茎からの病気等の持ち込みも見られますので、調整する際にセンチュウや白絹病が出ている地下茎を除去してください。

#### ◆ラナンキュラス

---

日中は採光のため内ビニルの開閉をしっかり行いましょう。日中は極端な低温管理ではなく、生育適温での管理を行いましょう。収穫が続くと草勢が低下しやすくなりますので、液肥を適宜施用し草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょう。

(中村 広)

### 畜産・飼料作物

平成24年がいよいよ始まりました。今年の生産、経営の目標を立ててみましょう。まず記帳、記録を徹底して、安定した経営を目指すことは非常に重要なことです。

今月は1年で最も寒さの厳しくなる時期です。家畜の生産性の低下や、子牛等の下痢、呼吸器系の疾病が多く見られる時期でもあります。以下のことを徹底して家畜の疾病を予防しましょう。

#### ①防風対策

家畜の体に、直接風が当たらないように畜舎を補修し、シートやコンパネ等を利用してすきま風を防ぎましょう。

#### ②換気対策

昼間の気温の高い時間帯には換気を行い、新鮮な空気



を取り入れるとともにアンモニアなどの有害物質を除去しましょう。

### ③ 飲み水の凍結対策

早朝の家畜の飲み水の確保のため、水道管の凍結予防など事前にできる対策を行いましょう。また子牛にはできるだけ温水を与え食欲の低下を防ぎましょう。

### ④ 子牛の下痢対策

子牛房の敷料をこまめに交換し、乾燥したノコクズやワラ等を随時補充し、保温効果を高めましょう。遠赤外線暖房装置等を利用した防寒対策も有効です。

昨年1月から2月にかけて、県内の養鶏農場で13件の高病原性鳥インフルエンザが発生しました。県内で二度と発生させないためにも、農場全体の消毒を徹底するとともに、野鳥侵入防止のための防鳥ネットの破れや、鶏舎の隙間等がないか再点検しましょう。また殺鼠剤などを使ってネズミ対策も充分に行い、ウイルスが農場内に侵入しないよう防疫対策を徹底しましょう。

(小坂昭三)

## 特用作物

### ◆ 茶

---

厳しい経営環境が続きますが、これまでの技術・経営の見直し、経費節減と品質・収量向上による所得向上に努めましょう。また、次年度に向け機器類の早めの点検・整備を行いましょう。

#### 1 寒さ対策

平年より低温傾向が予想されます。寒風や急激な低温による、幼木・中切園の成葉の青枯れや幹割れ（裂傷型凍害）等の凍寒害が懸念されます。被害を受けやすい茶園では、防風ネットや土寄せ等による寒風・幹割れ対策等、早急な対応を図ってください。また、山間地では積雪の重みによる枝折れや裂傷防止が必要です。

#### 2 植え付けの準備

雨の少ない今月は定植準備の最終時期です。茶は永年作物として、摘採するまでに4～5年かかり、また、一度植え付けると植え替えが難しい作物です。新植に

当たっては地域性と茶樹の特性を理解した上で、品種・土地の選定をしましょう。

深根性の茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壌は、排水が良く耕土の深いことが求められます。

地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場は極力避けましょう。

粘質土壌で水はけが悪いほ場、水が流入するようなところでは、深耕による混層や明渠、暗渠等の対策を事前に行います。

また、線虫被害が懸念されるほ場では土壌消毒を早めに行い、アルカリ性の高い土壌や改植茶園では、土壌 pH 調整や土壌たい肥施用による地力増強を図りましょう。

(岩切健二)

## ◆しいたけ

---

### 1 植菌と仮伏せ

労働力の分散や病虫害防止のため、植菌作業はできるだけ早めに行いましょう。

植菌後の原木は、菌糸の活着と初期の成長を促進するため「仮伏せ」を行います。原木を地際から40%以下の高さに横積みし、ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないよう被覆し、上面は雨が良く通り、日陰が出来るようにして、保温と保湿を図りましょう。

### 2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いシイタケです。肉厚のシイタケ生産が可能ですが、防風垣の設置などほだ場の湿度の保持や、袋かけによる保温・保湿に努め、シイタケの成長を促す必要があります。

また、散水を行う場合は、採取予定日の一週間前にはやめて、日和子での採取を心がけるとともに、シイタケが凍結しないよう散水時間等にも注意しましょう。

### 3 採取

発生したシイタケは、目標とする品柄に応じ、若干早めに採取しましょう。

(田中 貴司)

## ◆葉たばこ

---

明けましておめでとうございます。本年も品質・収量の安定化に向けて取り組んでいただきますようよろしくお願い致します。

今月は、子床準備や本畑準備等が主な作業となります。

- 1 子床準備として、肥土と子床肥料の混合は、仮植20日前までに行いましょう。
- 2 肥料設計は、土壌検定結果及び前作物調査を参考にして行いましょう。
- 3 堆肥散布は全面散布ではなく、スジ蒔散布を行いましょう。また、晩作、グレー葉生出防止のためにも未熟堆肥の投入は避けましょう。
- 4 畦立は、練畦防止のために、土壌水分が約60%（土壌を一握りし、2～3個に割れる程度の水分）を目安に、移植1ヶ月前までに実施しましょう。あわせて溝堀機等を使い排水溝を完備しましょう。
- 5 肥土消毒や土壌消毒を行う際には、農薬使用基準に則って使用しましょう。

(中矢恭輔)

#### 内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

## なになに農業アラカルト

### 防ごう農作業死亡事故！

---

宮崎県では毎年、農作業安全推進対策の一環として、農作業事故の実態調査を行っています。

農作業事故の発生件数は、昭和60年の669件をピークに年々減少し、近年は350件前後で推移しています。

農作業事故の傾向としては、事故者の高齢化が顕著になっています。昭和57年には10%であった60歳以上の事故者の割合は、平成21年には59%となっています。また、同様に女性の割合も28%から43%に上昇しています。

過去5年間の農業機械による事故の内訳は、乗用型トラクターによるものが17%、農用トラックが16%、草刈機が16%と上位を占め、これらで事故の約半数を占めます。

農作業事故のうち、死亡事故は毎年10数件発生しており、平成23年についても、新聞に掲載されたものだけで11件に上っており、特に10月に3件、12月に4件と相次いで発生しました。

この11件のうち10件は農業機械作業中の事故で、いずれも機械の下敷きとなり亡くなられています。

そのうち7件はトラクターの操作時の事故でしたが、いずれもシートベルトの未着用又は安全フレームの未装備でトラクターの下敷となる事故でした。

農作業に従事する際には、いつでも危険が隣り合わせにあることを認識して、次のことに気をつけて作業を行いましょ

- 1 作業に適した服装など身支度を整えましょう。
- 2 点検は安全作業の第一歩。機械の日常点検、定期点検はもちろん、始業点検も必ず行いましょう。
- 3 安全キャブフレームのあるトラクターを使用し、シートベルトの着用を徹底しましょう。
- 4 走行時は路面状況や障害物に注意しましょう。
- 5 作業が終わったら、ほ場を出る前に左右のブレーキを連結しましょう。
- 6 ほ場退出時は、作業機を下げて直角の向きで退出しま

しょう。

7 複数人での作業時には合図したり、声をかけ合ってお互いに安全を確認しましょう。

8 こまめに休憩をとりましょう。

9 「お疲れさま」「おかえりなさい」のあいさつを習慣にしましょう。

(猪本 聡司)

# みんなが待ってるよ 無事にカエろう

## 農作業事故防止の 9のポイント

その1

作業に適した  
服装など  
身支度を  
整え  
ましょう



その3

安全キャブフレームの  
あるトラクターを  
使用し、シート  
ベルトの着用  
を徹底し  
ましょう



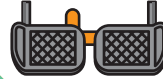
その2

点検は  
安全作業の第一歩。  
機械の日常点検、  
定期点検は必ず行い  
ましょう

その4

走行時は  
路面状態や  
障害物に  
注意  
しましょう

作業が終わったら  
ほ場を出る前に  
左右のブレーキを  
連結しましょう



その6



こまめに休憩を  
とりましょう

その9

「お疲れさま」  
「おかえりなさい」の  
あいさつを習慣に  
しましょう

その8

複数人での  
作業時には  
合図したり、  
声をかけ合っ  
てお互いに安全を  
確認しましょう

その7

ほ場退出時は、  
作業機を下げ  
て直角の向き  
で退出しまし  
ょう

## 向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害全般	－	コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病 つる枯病	やや少 やや少 やや少 並 やや多 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は高温、多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、園外に持ち出します。
	黄化えそ病 ※ (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	－ やや多	感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	タバココナジラミ類	並	本虫は低密度でも退緑黄化病を媒介します。また、効果のある薬剤が少ないため、早期発見・早期防除に努めます。
	病害虫全般(改植時の留意点)	－	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防防除し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 菌核病 黒枯病	やや多 やや少 並 前年と同程度	斑点病の発生がやや多の状況です。 いずれの病害も予防・初期防除を徹底し、罹病した枝葉は感染源となるので発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出します。
	アザミウマ類	並	10花当たりの寄生虫数が1頭から被害果が出始め、また、多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並 やや多 前年、前々年より少ない	灰色かび病の発生がやや多い状況です。日中の換気、夜間の保温を行い、また、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は、必ず株全体を除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。
	タバココナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	やや多 やや多	いずれも病害の発生もやや多の状況です。うどんこ病は多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。一方炭疽病の発病した株は、早期に除去し新たな感染を防止します。
	アブラムシ類 ハダニ類	並 やや多	

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。